

研究委員会企画公開シンポジウム 「テスト学からみた高大接続改革」

——企画主旨——

倉元直樹（東北大学）

1. 高大接続改革の経緯

平成 25 年 11 月 16 日の大学入試センター主催のシンポジウムで「大学入試改革の季節が巡ってきた」との発言があった。学制施行以来、わが国では間歇的に大学入試に関する問題が提起されては忘れられ、似たような提案が現れては消えて行き、現在に至る。

高大接続改革との表現は高校教育と大学教育、その接続関係を一体的に改革するとの趣旨だが、一般の関心は大学入試に集中する。季節の到来を告げたのは自由民主党に設けられた教育再生実行本部の第 1 次提言（平成 25 年 4 月 8 日）である。本質はグローバル人材育成に向けての英語教育改革であったが、提言の一部を切り取って「大学入試に TOEFL 導入」と報じられたことで、入試改革論議に火が付いた。

本格的な議論の展開は官邸に設けられた首相の私的諮問機関である教育再生実行会議第 4 次提言（平成 25 年 10 月 31 日）による。「大学入学者選抜を、能力・意欲・適性」を多面的・総合的に評価・判定するものに転換する・・・」として、「達成度テスト（基礎レベル）（仮称）」「達成度テスト（発展レベル）（仮称）」の 2 種類のテストの導入が提言された。

中央教育審議会高大接続特別部会は平成 24 年 8 月 28 日の文部科学大臣による諮問を受けて始まっていたが、教育再生実行会議の提言を取り入れる形で議論が進み平成 26 年 12 月 22 日の答申に至った。

2. 高大接続改革答申の概要と現在の議論

答申では「確かな学力」の 3 要素として「主体性・多様性・協働性」「思考力・判断力・表現力等の能力」「知識・技能」という概念が提起され、大学入試ではそれらを測ることが要請されている。現行の大学入試センター試験は廃止、高等学校で育成すべき「知識・技能」の評価を中心とした「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「思考力等」の評価を中心とした「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」に再編される。大学の個別試験では「主体性・多様性・協働性」を含む学力を高水準で評価するとされている。

新たな二つのテストでは、年複数回の実施、記述式の導入、CBT の導入、民間の資格・検定試験の活

用などが提言されている。いずれも、現在の仕組みを抜本的に変更するもので、テストの基本設計や具体的な実施方法等、現在行われている制度からは想像しがたい内容が提言されているが、平成 31～32 年度には新たな仕組みが動き出す予定となっている。

現在は議論の場が高大接続システム改革会議に移り、「中間まとめ」（案）が平成 27 年 8 月 5 日に示された。平成 32～35 年度は試行期間、実施時期が平成 36 年度以降に繰り延べとなったが、依然としてフィージビリティの見えない矛盾した内容が多い。

3. 「テスト・スタンダード」と高大接続改革

日本テスト学会は「科学的基礎と教育的理念に裏付けられた新しいテスト法の考え方と評価技術の研究開発・実用化」等を目的として平成 15 年に発足し、今年で 12 年目を迎えた。平成 19 年にはわが国のテスト慣行を踏まえた上でのテストの品質基準である「テスト・スタンダード」を発表した。「真に役に立つ知見を社会に提供することが、テスト学会の目標」（学会 HP 繁樹理事長挨拶より）である以上、会員の専門的知見を結集して作成した「テスト・スタンダード」は我が国のテストの守るべき規範を示したものである。もちろん、大学入試を含む日本で実施されている大規模テストが「テスト・スタンダード」に完全に適合しているわけではないが、あるべきテストの姿と照らし合わせて改革案がどのように見えるか、学会の場で議論することが必要である。また、今回の答申には妥当性、信頼性、IRT、CBT といったテストに関連する学術用語も頻繁に登場するが、果たしてどうなのか。無関心でいることはできない。

4. 公開シンポジウムの企画主旨

教育は国や社会の将来を左右する重要な公的営みである。我が国では大学入試はその要に位置づく。それを支えるには多くの関係者の尽力と同時に、基礎的、実際の諸理論と現実 に即した技術が必要となる。今回の改革提案は教育現場の必要から出たものではない。では学問的にはどうなのか。より良い方向に向かっていくために会員、非会員を問わず、現状を統合的に理解し、認識を共有する好機としたい。